

培った経験と人脈を 「音楽のまち・ひめじ」のために



音楽プロデューサー

たど あき ひと
多戸 章人さん

今年4月、姫路市文化国際交流財団の音楽プロデューサーに就任した多戸章人さん。芸術監督の池辺晋一郎さんと連携し、財団が実施する文化振興事業、舞台公演、普及活動などを企画制作するほか、運営機能強化のためのリーダーの役割も担います。

多戸さんは東京都出身。父がNHK交響楽団のチューバ奏者で、幼い頃からトップの演奏にふれてきました。武蔵野音楽大学でトランペットを専攻し、プロへの道も考えたそうですが、「周りを見渡すと、実力のある人は他にたくさんいた」。大好きなオーケストラにかかわっていきたくと裏方を目指し、宮崎隆男さん、上原正二さんに師事。平成12年にN響のステージマネージャーに就任しました。

演奏会のスケジュールが決まるとホールの下見に行き、音の響きを確認。指揮者の好みを考慮して最適な奏者の配置を決め、当日は全員の椅子と譜面台をセッティング。指揮者やコンサートマスターの動きが見やすいかどうか、指揮者の位置からはどうか。「些細なストレスもなく『なんだかわからないけど演奏しやすかった』と思われるように」、椅子の角度や譜面台との距離、譜面台の高さなど、100名を超えるメンバー一人ひとりの好みを把握していたといいます。

「若い人にもっとこの仕事を極めてほしい」とN響を離れ、平成28年、加東市東条文化会館コスミックホールにチーフプロデューサーとして就任。同ホールが平成2年から毎年実施している日本木管コンクール第1位の副賞を「日本センチュリー交響楽団との共演」にするなど、企画制作全般を担っています。

姫路でも肩書はプロデューサーですが「『なんでも屋』だと思っている」と多戸さん。ディレクター、ステージマネージャー、アーティストマネージャーなど、さまざまな役割を引き受ける覚悟があるといいます。「広報のいろんなアイデアを試してみたいし、アウトリーチ（アーティストが市民生活の場に出向き演奏活動などを行う普及活動）もどんどんやっていきたいし、アーティストと向き合う姿勢のようなものも伝えていきたい。僕が来たことで、関西圏のオケの人たちが『なにか楽しいことが起こるんじゃないか』とおもしろがってくれている。僕のこれまでの経験や人脈を、姫路でたっぷり活かすことができれば」。

他にもさまざまなアイデアを語ってくださった多戸さん。「音楽のまち・ひめじ」プロジェクトがこれからどのように発展していくのか、期待が高まります。

表紙解説

書写の里・美術工芸館

茶碗「竹林の図」1979年

清水公照刻、金沢・大樋長左衛門窯焼成
常設展示「清水公照すみ・いろ・つち」出品作品

会期：6月9日(土)～8月26日(日)まで

清水公照と金沢の陶芸家・大樋年朗氏（10代大樋長左衛門）との交流は長く、公照が描いた絵日記を見ても、東大寺別当に就任する以前の昭和48年頃から別当を退いた晩年に至るまで、毎年のように足繁く訪問していた様子がうかがえます。昭和54年には大

樋家の襖に十六羅漢の絵を豪快に揮毫したり、昭和60年の年朗氏の日本芸術院賞受賞祝賀会に出席したりしました。年朗氏の方も公照を茶会に招いたり、金沢で中心となって公照会を立ち上げたりしています。

また、公照没後の平成13年には、生前公照が大樋窯で制作した茶碗を当館に寄贈いただきました。この茶碗はその一つです。大樋焼特有の飴釉が全体に掛かった楽茶碗で、胴の部分に竹と「雙清無事」の文字が公照によって刻まれています。清風が吹き渡る竹林のように、澄み切った清々しい境地を、この茶碗に表現しているのかもしれない。